動の始源と不死性

——プラトン『パイドロス』245c8–e2——

鎌田 雅年

Masatoshi KAMADA

プラトン『パイドロス』の魂の不死論証において，245c8–e2 の箇所[1]（以下「始源からの論証」とする）は不死論証の半分以上も占めている割には，論証全体に対してどのような役割を果たしているかについて研究者の間に意見の相違がある。本稿の目的はその意見の相違が何に由来するのかを検討した上で，この箇所が論証全体に対しどのような意味を持っているかを明らかにすることである。

1　始源からの論証の前段階

始源からの論証に先立って，自分で自分を動かすものが不死であることを証明する議論（以下「自動性からの論証」とする）がなされている。それをテクストのまま引用してみよう。

> 「(1) 魂はすべて不死である。(2) というのは常に動いているものは不死だからである。(3) 他を動かしもするが他によって動かされているものは動きの休止があるゆえに，生の休止がある。(4) 実際自分自身を動かすものだけが，自分自身を放棄しないから，決して動くのを止めない[2]。」(245c5–8)

(1) は魂の不死論証全体の結論である。(2) 以下の議論は自分で自分を動かすものが不死であることを証明するものであり，後に魂が自分で自分を動かすも

[1] Burnet(OCT) や Schanz(Loeb) のテクストではこの箇所は直前の箇所とコンマで区切られている。現在では，明確にピリオドにする研究者 (De Vries [4], Rowe [9] and Heitsch [6]) も含めて，ここで新しい論証に入ると考えられている。ただし Robin など，ἀειχίνητον の代わりに αὐτοχίνητον(245c5) を読む研究者のこの論証の捉え方はまた異なるようである。後者の解釈については後で論ずる。

[2] この箇所のテクストについては前註を参照のこと。

のであるという命題とともに魂の不死を導き出すはずのものである。この自動性からの論証を藤澤 [11] の解釈に従って整理してみよう[3]。

常に動いているものは不死である。(2)
自分を動かすものは常に動いているものである。(4) ← (3)
［且，自分を動かすものは動の始源として，不生・不滅である。］(245c8–e2)
∴自分を動かすものは不死である。(245e2–3)

このように整理してみると判るように，論証の第三段階は論証には直接必要のないもののように見える。それゆえ問題があるとは言え[4]，自分を動かすものの不死論証は自動性からの論証だけで十分であると考え，始源からの論証は補足的・補強的なものであると考える研究者もいる[5]。他方，自動性からの論証と始源からの論証とはどちらも魂の不死論証には必要不可欠であると考える研究者もいる[6]。私も不死論証には両方の論証が必要であると考えるが，彼我の意見の相違は (2) のἀειχίνητον の解釈によると思われる。次にその点を考えてみよう。

「常に動いている」の意味

自動性からの論証が自分を動かすものの不死の論証にとって必要かつ十分であるためには,「常に動いている」という命題が「永遠に動いている」ことを意味しなければならない。Hackforth は (4) の「決して動くのを止めない」(οὔποτε λήγει κινούμενον) ということが「常に動いている」ということの意味だとして，これで自動者が不死であることは証明されたと考えている[7]。また田中も，

「不死の証明はこれだけでも成り立つと言えるだろう。なぜなら，
いつも動いてやまぬものは死なぬとされていて，他によって動か

[3] 藤澤 [11], p107.

[4] 問題というのは，テクストの読みにも関係するが，(2) のἀειχίνητον をどう解釈するかという点である。テクストの他の読みとしては，Ritter や Robin(Budé) が採用している Oxyrhynchus papyrus の αὐτοχίνητον がある。これを採った場合，自動者が不死であることの証明は 245c5–e2 の全体でなされることになり，二つの部分には分けられない。というのはこの場合，自動者が不死であることの証明は直接にはそれが動の始源であることからなされねばならないからである。論証としてはこれも可能である。むしろこっちの方がすっきりした印象さえ受ける。しかし αὐτοχίνητον という語がプラトンの他の作品には見出されないということ，ἀειχίνητον の方の読みが伝統的に支持されてきた読みであることなどを考慮して私はἀειχίνητον の読みを採用する。解釈については後で論ずる。Cf. 藤澤 [11], pp107–108; Robinson [8], pp111–112.

[5] Cf. Hackforth [5] and 田中 [10].

[6] Cf. Hermeias [2], pp102–103; Bett [1], n.5.

[7] Hackforth [5], p66.

> されるものには，いつそれが中絶するかわからぬ不安があるけれども，自分によって動かされるものには，それがないから，いつも動いていることができる。従って不死であると言ってもよいわけである。」

と言って，自動性からの論証の十分性を認めている[8]。しかし「常に」は「永遠に」を含意するだろうか。Bett が考えるように[9]，「常に動いている」ということは，「常に動いているという性質を本質として持つものが存在する」ということは含意するが，その存在が「永遠に存在する」ということまでは含意しないであろう。従って自動性からの論証はそれだけでは十分ではない。自分で自分を動かすものが永遠に存在するということは続く始源からの論証で証明されねばならないのである。果たしてそれは達成されているのか。

2 始源からの論証の詳細

問題の箇所をテクスト通りに引用してみよう。

> 「(1) 動かされる限りの他のものにとってそれは動の源であり始源である。ところで (2) 始源は生成され得ないものである。というのは (3) 生成するものはすべて始源から生成するのが必然であるが，(4) 始源は何ものからも生成しないからである。というのは (5) もし始源が何かから生成したら，(6) それは始源から生成したことにはならないであろうから。(7) 生成され得ないものである以上，それが滅ぼされ得ないものでもあることは必然である。というのは (8) 実際始源が滅びたら，始源自身が何かから生成することも，他のものが始源から生成することもなくなるだろう，(9) いやしくもすべてのものが始源から生成しなければならないならば。まさにこのような意味で (10) 自分で自分自身を動かすものは動の始源なのである。(11) 自分で自分を動かすものは滅びることも生成することも有り得ない。(12) さもなくば，天の全体と生成の全体は崩壊して止まってしまい，二度と再び動かされるものがそこから生成する始源を持たないだろう。」(245c8–e2)

ここで論証されているのは何か。この箇所の結論は (11) で表明されている。すなわち「自分で自分を動かすもの」が生成も消滅もしないということがここで証明されねばならないことである。さてそれはどのようになされているか。論証の構造が判りやすいように再構成してみよう。

---

[8] 田中 [10], pp252–253.

[9] Bett [1], pp5–6.

大前提：始源は生成も消滅もしない。(2)(7)
小前提：自分を動かすものは他のものの動の始源である。(1)(10)
結論：従って自分を動かすものは生成も消滅もしない。(11)

(3) から (6) と (8)(9) は，(2)(7) で示されている大前提の論拠であり，(3) から (6) の議論でで始源が生成しないこと，(8)(9) の議論で始源が滅ぼされ得ないことが別々に証明されている。(12) は (11) の結論を補強する議論であると考えられる。大前提からこの推論を見て行こう。

2.1 大前提

大前提ではまず，始源一般についてそれが生成しないということが言われている[10]。

A/ 始源は生成しないことを証明する議論

「(3) 生成するものはすべて始源から生成しなければならないが，
(4) 始源は何ものからも生成しないからである。」

(3)(4) は存在するものを始源とそれ以外のものに分け，それ以外のものを生成するもの (τὸ γιγνόμενον) と同定し，それがすべて始源から生成しなければならないことを述べるものである。ここにはちょっとした観点の移動が見られる。つまり (1) では「動の始源」と言われていたが，ここでは特に「生成の始源」と考えられている点である。当時は一般に生成は動の一種と考えられていたから，この観点の移動は問題ないと思われるが，後に動の始源と魂とが同定されるときには問題となるかも知れない[11]。

「(5) もし始源が何かから生成したら，(6) それは始源から生成することにはならないだろう。」

(6) についてはテクストの問題がある。今は写本通りに読むことで間違いないと思われるが，この箇所の背理法による議論を整理しておく[12]。

[10] この点はあまり触れられていないが，(3) から (9) までの議論は始源一般についての証明であると考えた方が，この論証の最後の部分 (12) で述べられていることが生きるように思われる。そうでなければ，(12) は (8) の部分の単なる繰り返しになってしまうだろう。Cf. Rowe [9], pp174–175.

[11] Cf. Bett [1], pp8ff.

[12] この箇所については藤澤 [11] が詳しい。藤澤は，「生成するものはすべて始源から生ずる」という命題は，始源というものの定義から自明であるが，「始源自体は何ものからも生じない」ということの方は証明を要するとして，(5)(6) でその証明がなされていると考える (p109)。また彼が，Burnet らの読みは背理法として「形式的に少し変則である」

前提：生成するものはすべて始源から生ずる。(3)
仮定：もし始源が何かあるものから生じたら，(5)
帰結：それは始源から生じたことにはならないだろう。(6)
結論：始源以外のものから生ずるものが少なくとも一つある。
∴この結論は前提と矛盾する。
∴仮定は偽であり，始源は何ものからも生じない。(4)

この背理法による議論には恐らく当然のこととして明示されていない前提がある。それは始源というものは一つしかないという前提である。もしこの前提がないとしたら，上の議論の帰結は簡単には出て来ないだろう。Hackforth が写本の読みを不可としたのもこの点が明示されていなかったからだと思われる[13]。確かに始源が何かから生ずるということと，生成するものが何らかの始源から生ずるということは一応別の事態として考えれられる。しかしその場合，生成するものの始源と何かから生じた始源とは別のものと考えねばならない。あるいはこれらを同じ始源と考え，始源を生む始源を別のものと考えるにしても，始源は複数になる。また始源の始源を辿ることは無限背進に陥ることになる。従って，始源が一つしかないという前提に基づけば，これらのことを別の事態として両立すると考えることは出来ない[14]。次に始源というものが滅ぼされ得ないということの証明へと進む。

B/ 始源は滅ぼされ得ないことを証明する議論

「(7) 生成され得ないものである以上，それが滅ぼされ得ないものでもあることは必然である。」

始源が生成され得ないということからそれが滅ぼされ得ないものでもあることは「必然」(ἀνάγχη) であると言われている。何故か。先ず始源というものの一般的定義から，次の仮定は認められねばならない。

「(9) いやしくもすべてのものが始源から生成しなければならないならば。」

(p110) と言っているのはこういうことであろう。ここの背理法で最終的に否定されるべき仮定は,「生成するものはすべて必然的に始源から生ずる」(245d1–2) という前提命題の矛盾命題，すなわち「始源以外のものから生ずるものが少なくとも一つある」となるだろう。そしてこの矛盾命題は写本の読みにほぼ対応している。つまり「始源が始源から生じたことにはならない」というのは「始源が始源以外のものから生じた」ということであり，これは先の矛盾命題を満たす命題にほかならない。Burnet らの読みでは,「その始源はもはや始源ではなくなるだろう」となり，始源としての資格の剥奪を述べるものとなり，始源からの生成とはならないという点が明確に出て来ないということであろう。

[13] Hackforth [5], p63.n1.

[14] Cf. De Vries [4], pp122–123; Rowe [9], pp175–176.

もしこの仮定を認めるならば，次の仮定とその結論も認めねばならないだろう。

「(8) 実際始源が滅びたら，始源自身が何かから生成することも，他のものが始源から生成することもなくなるだろう。」

このように結論された直後に (10) で自分で自分を動かすものと動の始源とが同定され，それが生成も消滅もしないとされる訳だから，ここで始源が消滅し得ないという証明が終わっていると考えねばならない。しかしこの終わり方はやや唐突である。背理法による議論の省略された部分を補って考えてみると，

前提：始源は滅び得ない。
仮定：もし始源が滅びたとしたら，
帰結 1：始源自身が何かから生成することはない。
帰結 2：他のものが始源から生成することもない。
結論：生成ということが全く行われなくなる。
∴この結論は不合理であり，仮定は偽である（＝前提が真である)。

となる。確かに世界が滅びるということではなく，世界が存在しながら生成を含むすべての動が全くない世界は仮定の上でも考えることが困難であろう[15)]。

2.2 小前提

(1)(10) によって表明されている小前提の論拠は明示されていない。しかし「動くということ」について,「動かすもの」と「動かされるもの」とを区別し，他方で動の始源とそれ以外のものを区別した場合，始源は「動かすもの」の方であることはほとんど自明と言ってよいだろう。

2.3 結論

(10) で,「自分で自分を動かすものが動の始源である」ということが再確認され，(11) で「従って自分を動かすものは生成も消滅もしない」と結論される。この結論を補強しているのが (12) である。

「(12) さもなくば，天の全体と生成[16)]の全体は崩壊して止まってしまい，二度と再び動かされるものがそこから生成する始源を持たないだろう。」

[15)] この箇所についてではないが，Hackforth [5] も (12) の部分について「それはどのギリシア思想家によっても考えられたことのない可能性であった」(pp66–67) と言っている。

[16)] (12) のテクストについては，大方の研究者が写本の読みを取っている。この箇所についても藤澤 [11] が詳しく，また正しいと思われる。私も写本の読みを取る。

(12) は (8) で始源一般について述べられたことを動の始源へと拡張したものであるから，十分に納得出来る帰結であると思われる。

以上が始源からの論証の全体である。次節でこの論証と魂の不死論証全体との関係についての最終的な結論を述べる。

3　結論：始源からの論証と魂の不死論証全体との関係

前節で詳しく見て来たとおり，始源からの論証によって「自分で自分を動かすもの」が生成も消滅もしないということが証明された。「自分で自分を動かすもの」が生成も消滅もせず，しかも動の始源であるということは，それが「永遠に存在する」こともまた意味するだろう。ここに至って初めて，「自分で自分を動かすもの」が不死であることが証明されたことになる。しかしここで一つの疑念が生ずるかも知れない。

> 「自分で自分を動かすものはまた自分で自分を静止させることができるのではないか。もしそうなら，それが「いつも動いてやまぬ」という必然性はないことになるだろう。それはあらゆる動の初めにあるとしても，それがいつか動きをとめるかも知れないという可能性は残るだろう。」[17]

しかし自動性からの論証の (4) で言われているように，「自分で自分を動かすもの」の本質が「決して動くのを止めない」ということであるとしたら，それが動きを止めることは自らを見捨てることであり，「自分自身を放棄しない」という言明と矛盾することになる。だからここの言明は強い意味で読まれるべきであって，自分で自分を静止させる可能性はないと考えねばならない。そしてそのためにこそ自動性からの論証の必要性があるのである。つまり，自動性からの論証によって，自分で自分を動かすものが，常に動いており，決して動きを止めないということを証明し，次に始源からの論証によって，その自動者が動の始源であり，生成も消滅もしないこと，従って永遠に存在することを証明しているのである。そこから，自分で自分を動かすものが永遠に動いているものであるという結論が導き出される。この結論と，次の箇所での魂と自動者との同定によって最終的に魂の不死が証明されるということになる。

このように「自動性からの論証」と「始源からの論証」とはどちらも魂の不死論証全体にとって，必要不可欠なものであり，それによって魂の不死はほとんど過不足なく証明されていると考えられる。

（大阪外国語大学・非常勤講師）

---

[17] 田中 [10], p254.

文献表

[1] Bett, R., "Immortality and the Nature of the Soul in the *Phaedrus*", *Phronesis*, 31, 1986, 1–26.

[2] Couvreur(ed.), P., *Hermeae Alexandrini in Platonis Phaedrum Scholia*, Georg Olms Verlag, 1971.

[3] Demos, R., "Plato's Doctrine of the Psyche as a Self-Moving Motion", *Journal of History of Philosophy*, 6, 1968, 133–145.

[4] De Vries, G.J., *A Commentary on the Phaedrus of Plato*, Amsterdam, 1969.

[5] Hackforth, R., *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952.

[6] Heitsch, E., *PLATON Phaedros*, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1993.

[7] Ostenfeld, E.N., "Self-Motion, Tripartition and Embodiment", *Classica et Mediaevalia*, 41, 1990, 43–49.

[8] Robinson, T.M., *PLATO'S PSYCHOLOGY*, Toronto UP, 1970.

[9] Rowe, C.J., *Plato: PHAEDRUS*, ARIS & PHILLIPS, 1986.

[10] 田中 美知太郎, 『プラトン II』, 岩波書店, 1981.

[11] 藤澤 令夫, 『プラトン『パイドロス』註解』, 岩波書店, 1984.